



RIKKYO SECOND STAGE

Contents

- P1 修了後も面白いセカンドステージ大学
 P2 入学式 P3 本科生の横顔
 P4,5 ゼミナールの紹介 P6 話題の授業
 P7 修了生の近況・サポートセンター活動
 P8 立教キャンパス散策・フィールドワークetc.

「立教セカンドステージ大学」は立教大学が提供する生涯学習の場です。シニア層の学び直しと再チャレンジをサポートします。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」
 編集責任：笠原清志 編集長：浅野 清
 発行日：2010年9月15日
 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



修了後も面白いセカンドステージ大学

立教セカンドステージ大学
 副学長 千石 英世



立教セカンドステージ大学（略称RSSC）も3年目を迎えています。本科で1年間の修業期間をおえて巣立って行った方々、また、専攻科で2年目を迎え、それを修了された方々、延べ人数にして約150名の方々が立教セカンド

ステージ大学を修了され、まさしく人生のセカンドステージへと歩み出されています。修学年齢条件は50歳以上、現受講生の平均年齢が62歳、この数字で「巣立って行く」は、やや無理のある表現では？という声が聞こえてきそうですが、とくにその声に耳を貸す必要はなさそうです。というのも多くのみなさんから届く近況報告は、この語にふさわしく、「いま、はつらつとして人生のセカンドステージを歩みつづけています」というものがほとんどなのです。

同窓会組織が整備されたこと、加えて、修了生たちの持続的活動を支援する「RSSCサポートセンター」が始動しはじめたこと、この二つがあずかって力となっているようですが、後者「サポートセンター」は、在学中にゼミや講義で培ったスキル・知識・知恵をたずさえて地域の人々と集い、また、RSSC修了生仲間とふたたび、みたびと集って、

賑やかに活動実績を積みつつある修了生たちの交流の場です。立教セカンドステージ大学は修了後こそ面白い、となりそうです。平均60有余歳にして、人生もう一度勉強してみようと決心し、本当に大学のキャンパスに通いはじめた、同じような決心をした人が百人ちかくいた、ともに机を並べて学んだ。学びなおした。そうした人物たちが修了後、再結集するわけです。背景はまさに千差万別ですが、この学びの経験は共有されます。これを共有して自立した個性がふたたび、みたびと結集するのです。面白くならないはずがない。

活動の一端を紹介しますと、読書会組織が二つ活動しています。会員の数が膨らんで二組に分けざるをえなかったとのこと。一方、文章を発信するグループもあります。エッセイからルポルタージュ、読書感想、観劇評などなどを自身の文章でつづり、小冊子にするグループです。冊子はたしか「すずかけの小径」といったと思います。キャンパス内の小径の愛称にちなんだ名前なのでしょう。また、首都圏に集う外国の人々と交流するグループ、地域の役所と協力し、地域おこしのアイデアを練っていこうというグループもあります。他にも活発に活動しているグループが十ほどあります。まったくもって面白くならないはずがないですね。（立教大学文学部教授）

新しい出発と出会い

立教セカンドステージ大学入学式

<入学式次第>		
入堂 (聖歌)		一同
序祷	チャプレン	八木 正言
訓辞	学 長	吉岡 知哉
紹介	学 長	吉岡 知哉
聖書	チャプレン	上田亜樹子
奨励「建学の精神」		
	院 長	松平 信久
アンセム		
祝祷	チャプレン長	佐藤 忠男
校歌		一同
退堂		一同



サクラ満開の
入学式(左)

2010年4月3日午前11時より、立教セカンドステージ大学本科3期生(88名)、専攻科2期生(64名)の入学式が池袋キャンパス諸聖徒礼拝堂にて行われました。

吉岡知哉学長、チャプレン長はじめ諸先生方や家族が見守る中、パイプオルガンの厳かな雰囲気にもまれて、立教セカンドステージ大学で学ぶ喜びと情熱を再確認いたしました。そして新たな出会いへの期待と自分探しの決意を心に刻みました。



チャペルでの入学式



上田亜樹子 チャプレン



吉岡知哉 学長



松平信久 院長

立教セカンドステージ大学の入学式に出席して

● 学校教育関係の仕事に携わってきた私は、多くの入学式に出会ってきました。その中でも今回私が体験した立教セカンドステージ大学の入学式は、その厳肅さに心打たれ、大きな感動を受けました。改めて、入学式とは「学びへの決意を促す場」であることを自覚しました。同時に先生方のお話を聴き、自分への問いかけと学ぶことへの決意を覚えました。更に、私はパウロの有名な言葉「自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知らねばならないことを未だ知らない。」を肝に銘じた1日でした。(後藤修)

● なんと憧れの♪ 蔦のからま〜る♪チャペルで入学式!届いた案内に思いがけないプレゼントを貰ったみたいで、ワクワクしたのも束の間、緊張と不安と恐れと羞恥を抱きながら大学へ向かいました。正門の立看板は立教大学の入学式に劣らない大きさで「オヤ?」と意外な感じを受け、会場に入るとすぐ入学式は始まりました。壇上には慎ましい衣に身を包んだ先生方、そして聖歌、チャプレンの序祷、教会の厳かな雰囲気と相まって感激的でした。そして何より学長の謙虚で礼に溢れた歓迎の言葉に不安は融けました。帰路正門の満開の桜の下で記念撮影をなさっていた幾組ものご夫婦の若やいだ姿が心に残りました。(佐々木恵子)

● 満開の桜と麗らかな晴天に祝福されて迎えた立教セカンドステージ大学のチャペルでの入学式は、とても厳かで私の想像を遥かに超えた感動的なものでした。壮年期を社会の荒波の中で過ごし、ようやく静かな風に漕ぎ出した新入生の顔は晴々としており、学び直しの意気込みが伝わってくるような気がしました。そんな情熱あふれる仲間達と一緒に新しい門出を共にできる喜びと、これから始まる学びの日々への期待に胸高鳴らせつつ、私達をこのような立派な入学式で迎え入れてくださった大学に、心から感謝の念を覚えました。(杉山友美恵)

● 40数年前、私の大学生活は大人ぶって遊ぶことでした。授業をさぼってジャン卓を囲み、くわえタバコでパチンコをして、酒を飲む。これが大学生だ、と粋がっていたのかもしれませんが、勉強をしたのかどうか、あっといふ間の卒業。それでも、社会の荒波にもまれて、一応、常識的な社会人となりました。

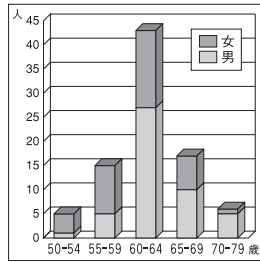
そして今春、私は昔と変わることはない、ウィリアムズ主教の見守るチャペルで、2度目の入学式を迎えました。この入学式で初めて、これから始まる新しい学生生活に、純粹な青年の気持ちで、心よりの感謝とお祈りをする事ができました。(三澤和弘)

2010年度本科生の横顔

プロフィール

◆ 年齢・性別は？

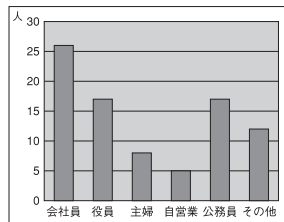
定年世代の60～64歳が過半数を占めていますが、70歳以上も7%に達しました。また、女性の割合は44%であり1期生、2期生を通じ、自然な男女比に近いと考えます。



RSSCの建学の精神である「学び直し」と「再チャレンジ」には年齢や性別は関係がないことを現しています。傾向としては男性は定年期を迎える60歳以上が多く、女性はやや早い時期から行動を起こしているようです。

◆ 職業は？

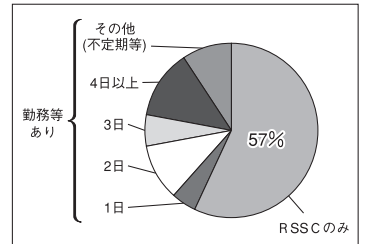
入学前の職業を尋ねました。RSSCの知名度が上がってきたためでしょうか、前職もバラエティに富んでいるようです。



◆ 現在は？

現在の活動状況を探りました。日頃の活動としてRSSC通学のみか、勤務、自営、ボランティアなどと並行して活動しているか、また勤務等の活動は週何日かの調査です。

全体の43%が「勤務等あり」と回答し、その内30%(全体の13%)は週4日以上です。特に女性は55%が、また65歳以上は61%が「勤務等あり」と高い比率を示しています。



◆ 居住地は？

東京、埼玉、千葉、神奈川が合せて90%以上ですが、静岡、栃木、福島から通学している本科生もおり改めて「学ぶことへの意欲」の強さに驚かされます。

フリーコメント

本科生から寄せられた多くのフリーコメントのうち代表的なものをご紹介します。

◆ 入学の動機

- ・ 知ることの楽しみを生涯にわたって実現したい
- ・ これからの生き方、自分探しのヒントを得たい
- ・ 特定の講座、分野の学習をしたい
- ・ 同世代の新しい友人、仲間との出会いの期待
- ・ 退職後の規則的な生活や社会との繋がりを
- ・ 新たな仕事、社会貢献のきっかけ作り

「学び直し」「知への探求」をベースとして目的は様々です。

キャンパスライフを通して、「人の輪」を求めるコメントが多く寄せられており、シニア世代の課題を見た気がします。

◆ 入学してよかったこと

入学して2ヶ月半経ちましたが『話ができる友達ができ、学ぶことの楽しさと充実感を感じた。』というコメントに集約されています。

大多数が、職種も社会経験も多様な人生経験豊かな新しい友人との出会い、短期間での接近に驚きと喜びを表現しています。また、新鮮で情熱的な講義と意欲溢れる学友との刺激的な毎日の学ぶ楽しさも多くコメントしています。さらに、ゼミ、フィールドワークなどの多彩な授業、図書館などの施設、委員会活動、全学共通カリキュラムにおける学部生との触れ合いなど、単に一方的に講義を受けるだけではない充実感がコメントから読み取れます。

◆ 入学して苦労していること

- ① レポート作成 楽しく充実している反面、学生生活から長期間離れていたためか、日々のレポートやペーパー作成には悩まされているようです。
- ② パソコン操作 この世代は未だパソコンに馴染んでいないとは言えず、「必須」的使用には苦労しているようですが、メディアセンターなどのサポートで徐々に習熟しているようです。
- ③ 時間が無い RSSC以外に勤務等を行っている本科生は両立に様々な工夫を凝らしているようです。

◆ 家族・知人から

『生き生きしている』『楽しそう』『明るくなった』『よく勉強している』『羨ましい』と、ほとんどの方から好意的なコメントをいただいておりますが、中には『物好き』『今更』というご意見も少し。「ご家族からの協力・激励」のコメントも多数あり、まさに感謝です。また、ご家族との話題が豊富になり、会話が増えたといううれしい副産物もありました。

ゼミナールの紹介



立教セカンドステージ大学の大きな特徴の一つに、ゼミナール単位の学習が挙げられます。

他の大学や一般のカルチャーセンターの社会人向け生涯学習プログラムとは一線を画す取り組みです。「教員と社会経験豊かな受講生が共に学習プログラムを作っていく」という視点から各ゼミナールが運営されています。現在ゼミナールは11クラス開講されており、担当する教員の専門分野も多岐にわたっています。すべての受講生は必ずいずれかのゼミナールに所属します。担当教員の指導のもと、ゼミ生同士での質問や活発な意見の交換により、主体的に研究が進められます。受講生はそれぞれ自分でテーマを決め、1年間の研究の成果を修了報告書（本科）、修了論文（専攻科）にまとめ、提出することが義務付けられています。

笠原 ゼミ

● 組織論

笠原先生はユーゴスラビアに留学、その後もポーランドの連帯運動を研究され、また現在はバングラデッシュとも深い交流をもたれている国際色豊かな先生です。ゼミではその国際色豊かな経験を我々に熱く語られます。



笠原清志先生

我々笠原ゼミのテーマは「教養とは何か・・・」です。その格調高いテーマにより近づけるようゼミ終了後も笠原先生を囲み、シャープペンをジョッキに持ち替えて幅広く「教養とは何か・・・」について熱心に議論を続ける本科生11名、専攻科生5名、計16名の個性豊かな仲間たちです。（T）

千石 ゼミ

● 人文学各分野（とくに文学／美術／歴史）

本科生4名、専攻科生14名で毎週アカデミックなゼミが開かれています。すでに全員の修了テーマを発表し終わりお互いにアドバイスをしあい、千石先生のオールラウンドな対応と的確なアドバイスの下、夏休み中には書き上げてしまいそうな勢いのゼミ生もちらほらといます。ひとつの竹の子を見つけたら、あっちにも、こっちにも修了報告書・論文のテーマが雨後の筍のごとく見つけられました。「現場主義を大切に」先生のこの一言、とても実感しています。（A）



千石英世先生

橋本 ゼミ

● 高齢者福祉・施設ケア・介護保険

橋本ゼミは本科生8名、専攻科生1名の構成です。橋本先生は長年高齢者福祉の現場で活躍され、その経験から得た「介護の今日的課題とケア」について話し合える場にしたいと話されました。



橋本正明先生

授業では、輪読会、高齢者施設での体験学習、介護保険制度を評価することで高齢者の生活、また高齢者の幸せについて考えます。合わせて、私たちは高齢期の幸せを左右する介護を自分事として考え、介護される者と介護者相互の信頼から生まれる「絆」について学んでいます。（T）

木下 ゼミ

● 社会老年学・M-G-T-A（質的研究法）

木下先生は高齢社会の諸問題を調査する過程で、独自の質的研究法「M-G-T-A」を確立なさいました。インタビューや実地調査を柱に良質な家を建てるのに似た研究法で、先生のまなざしは常に人間に注がれています。



木下康仁先生

本科生11名、専攻科生3名、計14名のゼミ生は、この研究法を基に調査方法やデータの分析、客観的に記述する力を養います。経歴多彩なゼミ生とは言え質的研究法は全くの未知の森です。頻繁に森の居酒屋で「水分補給」して励まし合い、良質な修了報告書・論文の完成を目指しています。（K）

上田 ゼミ

● 動物生態学・動物行動学・環境保全学

上田先生のもと本科生3名、専攻科生13名でスタートしました。全員、鳥だけでなく人も含めた生き物すべての環境に強い関心を持っています。地球環境の保全が話題になっている折、今年10月、名古屋で開催の生物



上田恵介先生

多様性会議が注目されています。さて、上田ゼミの基本はゼミ生のゼミ生による自主的な運営です。テーマはもちろん、その内容・形式もゼミ生が計画し実施しています。その分、責任の重さを実感していますが、先生の指導とゼミ生全員の応援、協力を得て軌道に乗せたいと思っています。（K）

渡辺 ゼミ

● アメリカ文学・詩人論

渡辺ゼミは本科生4名、専攻科生2名の少数精鋭のゼミです。本ゼミではゼミ生による自由研究報告を受けて質疑応答を行い、渡辺先生がコメントし、修了報告書・論文作成へと繋げていきます。また、「通勤電車で読む詩集」を輪読し、古今東西の名詩にふれることでポエジーに浸り新たな自分を発見したりします。自主ゼミでは、博物館視察や世界遺産のビデオ鑑賞など日常の学びと異なった視点からRSSCを楽しく、充実した日々を送れるようにと自発的な活動をしています。(A)



渡辺信二先生

庄司 ゼミ

● 家族論・ジェンダー論・福祉政策論

本科生10名、専攻科生5名です。修了報告書・論文のテーマは自由ですが、ジェンダー・家族問題に興味を持つ人も多いため、庄司先生の専門の近代家族問題、家族政策の講義を受けました。現在の家族を浮き彫りにする問題の提起で、一同大いに示唆を受けました。現在は各人がテーマ設定に関する試行錯誤の段階です。1回2、3人ずつ考えをペーパーで提出して、それを基にサブゼミも活用して、皆で議論しています。妻、母としてたどった道についての率直な話に感動し、毎回深い議論が行われています。(Y)



庄司洋子先生

佐野 ゼミ

● NPO/市民活動論・持続可能な地域づくり

佐野ゼミは本科生11名、専攻科生3名の構成です。ゼミでは社会公益のための様々な活動や組織を理論と実践事例の両面から具体的に研究し、社会貢献活動を新たなセカンドステージの生きがいにしていくことを目指します。また私たちが市民として地域で具体的にどのようなアクションを起こしその使命を果たして行くのかを学びます。教授陣で最若手の佐野先生は、学生の頃から様々なボランティア活動に取り組みられその理論は実践に裏付けられ、「公共人」を目指すゼミ生にとって鏡のような存在です。(M)



佐野淳也先生

古賀 ゼミ

● 日本経済論・産業構造論

ゼミのタイトルは大変お堅いようですが、古賀先生の温かいお人柄に惹かれて集まった本科生13名、専攻科生6名の大世帯です。異年齢、異業種集団で、毎回和気あいあいの中に研究を進めています。現在、誰もが人間らしく生きられる世界をめざして、一冊の本を輪読し、各自が感想を述べ合っています。内容は主に市民運動の難しさ、組織と言葉の問題点を掘り下げるといふものです。テーマは大変シリアスなものですが、ジョークが飛び交い、時に脱線したりして楽しく学んでいます。(M)



古賀義弘先生

鈴木 ゼミ

● 環境人類学・文化遺産の科学

人類の起源は？ およそ600万年前、人類の祖先が誕生、その後、進化を続けて現在に至っています。その過程、例えば直立二足歩行、言語、石器、火の使用、脳の発達等ヒトの進化を丁寧に説明していただき、毎週新しい発見を続けています。鈴木先生は趣味多彩で週2、3回のジムでのトレーニングを始めとして、スポーツ観戦、クラシック音楽鑑賞はてはNET麻雀、韓流ドラマと、若者・男性・女性を問わず話題豊富な方です。今年は本科生8名、専攻科生5名の13名で和気あいあい週1回のゼミを楽しんでいます。(M)



鈴木正男先生

坪野谷 ゼミ

● ざっくりばらんな経済と金融

メンバーは、本科生6名(男2、女4)、専攻科生7名(男5、女2)の13名で、とてもバランスの良い構成です。坪野谷先生のキーワードは「学びの方向付けと環境作り」。

修了報告書・論文は、先生曰く「テーマと目次が決まれば、70%完成したのも同じです」を信じて、ゆっくり取り組んでいます。私たちのモットーは「賢く学び、楽しく遊ぶ!」です。ゼミはあくまでもアカデミックに、そしてゼミ後の制限1時間?の“ノミネーション”で、先生を囲んで大いに懇親を深めています。(U)



坪野谷雅之先生

全学共通カリキュラム

本年度より全学共通カリキュラム（全カリ）受講可能科目数が、前年の59科目から155科目へと大幅に増えました。履修の上限も年間2科目から4科目となり嬉しい改定です。そこで、前期の受講状況を報告します。

前期開講74科目中、受講生の履修は43科目、履修人数は104名で、これは前年のほぼ倍です。5名を超える希望者があり抽選を行ったのは5科目、22名が残念ながら抽選漏れという結果になりました。

ここで前期人気ベスト3の発表です。1位「江戸と文学」（金曜5限）、2位「現代社会と環境」（木曜4限）、3位「規制改革を考える」（火曜4限）。ちなみに「江戸と文学」は3.2倍の狭き門でした。人気科目＝講義内容＋受講可能時限の公式が成り立つようです。

学部生と一緒に学べる全カリは、楽しみかつ貴重な場です。タッカーホールでの1千人を超す圧巻の授業。学部生には通じず、我々だけが深く頷いたりクスッと笑う教授の一言。居眠りする学部生は40年前の自分の姿、最前列で真面目にノートをとるのはその罪滅ぼしでしょうか。そして何より本当に大学生になったと実感するのが期末筆記試験。シーンと静まり返った教室に解答用紙をめくる音と鉛筆の音だけが響きます。なんとも言えない緊張感とその後の達成感。さあ、後期の全カリは何にしますか？（K）

「アジア・アフリカの貧困とNGO」

岩男 壽美子先生

貧困問題とは無縁のような、優和な印象の岩男先生ですが、国連機関の職員の家族として世界を飛び回り、赴任先のアフリカでは生死に係る、壮絶な体験をされていたと聞き驚きました。



授業はアジア・アフリカの貧困の現状と援助活動の紹介、様々な問題の解決策の探求などを学んでいます。また、国際舞台で活躍されてきた先生ならではの交友関係の広さで、ゲストスピーカーに「ボツワナ駐日大使」や「NPO法人ミレニアムプロミスジャパン理事長」などをお迎えし、アジア・アフリカの現状を生々の声で聴ける貴重な機会を得ています。

アジア・アフリカの様々な問題を知り、〈いかに解決していくか〉〈どんな活動や援助の方法が有効手段なのか〉など、授業を通して学んでいます。

また、先生の「貧困に対する援助は、アジアに集中しているが、アフリカの存在が次世代を担う若者たちに負担になるのを避けたい、それにはもっとアフリカに関心を向けてほしい。そして、微力だけれど、今、自分に来ることをする」と語られる熱い思いが伝わってきます。（S）

「心の変革」

横山 紘一先生

キリスト教を建学精神とする立教大学にあって、仏教思想である「唯識」を講義くださっているのが横山先生です。先生は東京大学農学部水産学科を卒業後、インド哲学科に進路変更し仏教思想を学ばれました。また1997年に興福寺で得度もされました。



唯識とは個人にとってあらゆる存在が「唯（ただ）」八つの「識」、即ち、表層心を表す眼識・耳識・鼻識・舌識・身識という五感に意識を加えた六識と、深層心で自我執着心を表す末那（まな）識、及び根本心を表す阿頼耶（あらや）識の八識によって成り立っているという大乘仏教の教えで、玄奘三蔵がインドから伝えられたものだそうです。先生はこれを「十牛図」という禅の悟りに至る道筋を十枚の絵で表した図を使い、私たち受講生に教え諭されますが唯識三年と言われているようでその理解は容易ではありません。とは言いながら、酒の席とともにしつつ先生の温かい人柄に触れ、受講生は徐々に悟りの境地に近づいているようです。（Y）

「セカンドステージの暮らしと社会保障」

丸尾 直美先生

福祉国家論・経済対策を専門とする丸尾先生は我が国の著名な経済学者のおひとりで、たくさんの著作や数多くの論文を発表されておられます。



授業では、先生の著書「どうなる？ どうする？年金と福祉」をテキストに、福祉国家として知られるスウェーデンと日本の社会保障の違いを対比しながら、日本の社会保障の何が問題で、どのように変わろうとしているか、どう変えるべきかを詳しく学んでいます。

私たち世代にとって社会保障の問題は、最大の関心事です。社会保障の実態を知った上で、これからのライフワークをどのように作っていくかが課題になりそうです。

セカンドステージに必要なものとして「生きがい、ライフワークを持つ」ことを先生は勧められており「学問で真を追求し、古美術と庭園造りに美を求め、ボランティア運動や人との交流で善を求めることが生きがいになる」という先生のあくなき好奇心と探究心から生きる刺激をいただいています。（H）

修了生の近況

立教セカンドステージ大学も2年が経過し、社会へ再び戻っていく修了生が増えつつあります。そこで社会に出て活躍中の修了生の近況をお届けします。

牛木洋子さん 1期生09年度専攻科修了

私は、専攻科を今年3月に修了いたしました。大学での2年間の学びにおいて、これからの人生を生きる上での多くの示唆や同じ方向性で物事を捉えることができ、心地よい距離感を持って付き合える友人を得たことが何よりの収穫でした。



そして、人生のセカンドステージをいかに生きるかを試行錯誤し、私なりに出した結論は「自分を必要としてくれる仕事があればする」「社会活動に参加することでした。また、これを実行するに際し、現在私は自宅近くの介護施設に入居している母を週末のみ自宅で介護していますが、一抹の後ろめたさを感じながらも「母の介護は、介護施設を活用する」ことでした。

社会活動としては、「NPO 航空鉄道安全推進機構」で理事の一人として、9月に札幌で開催される国際セミナーの準備の手伝いをしております。また、専門学校で週3日、キャリアカウンセリングの仕事にも携わり、就職難の折一人でも多くの学生が、夢に一步でも近づけるようアドバイスしております。そして、何よりも楽しみに、大切にしているのが、1期生の皆さんとの交流です。

浅賀はるみさん 2期生09年度本科修了

再び「おひとり様」になった40代の半ば、老後は、介護は…と思いつめるようになり、その不安を解消するには、ケア付き住宅を始めるしかないと思うに至りました。本科での一年間はそのための調査の時間



とし、今年は仲間が立ちあげた知的障害者のグループホームで働き、運営の様子を見させてもらっています。

以前から行っている介護・福祉の仕事仲間との高齢者住宅等の見学会や、一年前に立ち上げた、地元でのネットワーク作りのための「品川区をよく知る会」も、老後を安心した気持ちで過ごしたいという思いから始めたものです。活動の中で多くの人と出会い、情報を得て、以前感じた不安はあまり感じなくなってきました。

ハードとしてのケア付き住宅が出来なかったとしても、人がつながり支えあえば、たいいていの事はどうにかなるのではないかと思えるようになってきました。そうした思いをくじけずに勇気をもって少しずつ形にしていけたらと思っています。

サポートセンター活動

在校生や修了生の社会との関わり合いや社会貢献活動を支援するため、大学がサポートセンターを設置しています。そこで現在活動中の13サポートセンターの活動状況を順次紹介していきます。

都会・癒し・自然 交流会

大学で数々の自然環境問題などを学び、自然の恵みの大切さを知りました。そして「みどり」の大切さや健康を守るための「食べ物」の大切さも痛感しました。豊かな、生きがいに満ちた持続可能な社会作り貢献したいというコンセプトのもとで活動し、会員は現在27名を数えます。



4月から次のような活動をしています。

- ①沼津市戸田の棚田での「米作り」体験（あぜ塗り・田植え・田の草取り）、そして自分達で植えた稲が、秋には収穫（無事に育つか心配ではありますが）、稲刈りやかかし作りのイベントも楽しみです。
- ②秦野の「八重桜の里」を訪問し、花の摘み取り体験。薄紅色の八重桜の花摘みは貴重な経験でした。
- ③「銀座ミツバチ」の見学
銀座のビルの屋上で、頭上を飛び回るミツバチにビックリ！とれたハチミツが年間800kgにもなり、それを使って銀座発のケーキなどが生まれているとのこと。銀座の周りには緑と花がたくさんあるのですね。これからも様々な自然を体験し地域との交流も深め、その成果を皆さんに発信して行きたいと思っています。(S)

海外異文化情報研究会

アカデミックなネーミングですが、「親睦をベースに、好奇心旺盛に学びを深めよう」と海外駐在や外資系経験者等ユニークな経歴を有する人たちの集まりで、修了後も楽しめる、新しいスタイルのクラブライフを目指しています。



狂言ワークショップ

立教大学大学院「異文化コミュニケーション研究科」の女性も、テーマに応じ随時参加し華やかで活動的な雰囲気です。会員は20名。月一回の会合を開催し、ネットワーク拡大中です。

活動状況（予定）は次のとおりです。

- ・3月 「狂言ワークショップ」 大蔵流 善竹富太郎氏
 - ・4月 「狂言鑑賞」 セルリアンタワー能楽堂
 - ・4月 「ドイツ事情」 ドイツ立教会 磯 洋子氏
 - ・5月 「異文化コミュニケーションについて」
久米昭元 立教大学教授
 - ・6月 「ロシア事情」 ユーラシア21研究所 吉岡明子氏
 - ・7月 「ペルシャ事情」 元伊藤忠商事 金子正美氏
 - ・7月 「歌舞伎鑑賞」
 - ・8月 「落語鑑賞」
 - ・9月 「セルビア事情」
 - ・10月 「オランダ事情」
- (S)

立教キャンパス散策



メディアセンター受付

【メディアセンター】

立教大学ではインターネットを活用した教育支援環境の立教バーチャルキャンパス（V-Campus）が整備され、授業の情報、友達との連絡、レポート提出などネットを用いた学生生活を楽しめます。

メディアセンターではネットワーク環境整備、IT教育研究支援、事務系ネットワーク、全教室のAV設備、問合せサポートなどの業務を専任職員4名と業者で担当しています。今年から無線LANが整備され、個人のPCもV-Campusが利用できるようになりました。

ITスキルアップ講習会では初心者向けにPCの使い方からワープロ・表計算などのソフトの習得まで無料で講習しています。最近はセカンドステージ大学の受講生の受講が増えているそうです。我々、PCがちょっと苦手な年代でも、日常の連絡にはEメール、レポートにはWORDやEXCELが普通に使えるようになります。（A）



旧江戸川乱歩邸土蔵

【旧江戸川乱歩邸】

旧江戸川乱歩邸は、立教大学6号館の北側に隣接しています。推理小説家江戸川乱歩が後半生をすごした家で、現在は立教大学が譲り受けて管理しています。

江戸川乱歩は探偵小説の基礎を築いた作家で、この場所で、明智小五郎探偵と小林少年が活躍する「少年探偵団」や敵役の「怪人二十面相」が誕生しました。

乱歩は46回も転居を繰り返しましたが、1934年にこの地に移り住み、亡くなるまでの31年間を過ごしました。

敷地内には、邸宅と「幻影城」とよばれる土蔵があり、公開日には応接間が見学できます。乱歩はよくこの応接間に若手作家を集め育成に努めたといひます。愛用のベレー帽や丸眼鏡、ステッキなども展示されています。土蔵には乱歩の多くの蔵書・資料が保管されていますが、とくに目を引くのが著書を自ら年代ごとに整理した「保存用自著」やディッケンズなどの洋書です。公開は金曜日10:30~16:00（除く昼休み）です。（S）

フィールドワークetc.

立教セカンドステージ大学の講座には、教室での授業だけでなく実際に現地に飛び出して実物に触れて学ぶフィールドワークを組み込んだ講座が多くあります。その内の幾つかを紹介します。（U）



上高地梓川

上高地は標高1500m、焼岳・穂高に囲まれ清流梓川の流れて一層の清涼感が漂う場所です。流木あり、土砂の堆積あり、人間の手が加えられていない自然の姿が守られており「生命の多様性」授業の宝庫でした。

◆ 上田先生「生命の多様性」
次世代へ持続可能な社会を築くために人類と動植物の係り合いについて生態系の観察をフィールドワークと共に学んでいます。

○ 上高地



X線分析実験

◆ 佐々木先生「地球環境の変遷と未来」
地球環境の成り立ちから人間活動が地球システムに及ぼす影響、現状の維持や損傷の修復などを自然科学的な切り口から学んでいます。

○ 身近な環境（自宅の庭等）での浮遊粉塵を採取して、高感度X線分析装置を用いて元素分析を行っています。



東京証券取引所

◆ 坪野谷先生「暮らしに役立つ経済と金融」
経済と金融は日常の生きた知識が必要です。最新の資料と先生自身の豊富な現場での実務経験を基にセカンドステージに必要な経済の金融を学んでいます。

次のフィールドワーク等を通して日本経済の中枢を体感しています。

○ 日本銀行、東京証券取引所、三菱一号館美術館見学
○ 日本銀行マン講演、投資信託ファンドマネージャー講演、「60歳のラブレター」編者講演

◆ 森先生「コミュニティデザイン入門」
この講座は、地域のニーズを探り、自分を生かして地域に役立つ道を見つけることを目標とするものです

○ 「みんなのえんがわ池袋」「みらい館大明」訪問
いずれも地域の人によるNPO法人が運営するもので、「みんなのえんがわ池袋」は空き店舗を利用して地域の交流の場としています。「みらい館大明」は元豊島区立小学校の施設が生涯学習施設として開放されています。

編集後記

希望に燃えてチャペルに集った入学式から早や5ヶ月が過ぎ、受講生は学生生活を満喫しています。このユニークで充実した立教セカンドステージ大学の生の姿を伝えたいと願っています。大学の先生方、受講生の同僚・先輩、そして家族の協力と理解に支えられていることに感謝しつつ…（A）

◇ニューズレターNo.5 編集委員（五十音順）
【本科】浅野清 内山順子 嶋岡照代 城山修
関口正尚 田中茂穂 平澤勇 深草京子
松原康江 丸山とも子 吉川春子
【専攻科】川口ひとみ 齋藤つた江 島田一郎
内藤婦美子 山崎郁夫

